

すると目が開け、イエスだと分かった

(ルカ24・31参照)



カラバッジョ作「エマオの晩餐」(英・ロンドン ナショナルギャラリー所蔵)

(アンドレア・レンボ補佐司教〈東京教区〉によるこの絵の解説が最終面にあります。紙面を開き、絵を右に見ながらお読みください)

国際

- 教皇、中東での紛争拡大を憂慮 対話による紛争終結を再度訴える 2面
- レバノンで司祭が死亡 イスラエルの攻撃受け 2面
- 中東各国のカトリック信者 動揺と悲しみの中 祈りで一致 3面
- シノドス最終報告書 各部会から発表 3面
- 国際記事ダイジェスト 4面
- 教皇の一般謁見講話 4面

国内

- 東日本大震災から15年 仙台・福島 5面
- 駐日ベネズエラ大使インタビュー 6面
- 映画『教誨師と死刑囚』製作中 坂口香津美監督に聞く 6面
- 四旬節に聞く 受洗の物語 6面
- 臨時司教総会 社会系委員会等の方向性承認 7面
- 国内記事ダイジェスト 7面

- 主日の福音解説 8・9面
- 短歌・俳句・映画紹介・きょうをささげる(4月の祈り) 10面
- 訃報・告知板・番組 11面
- イエスの食卓に招かれて レンボ司教による絵の解説 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパンニュース 



カトリックジャパンダイジェスト 第12号

発行=カトリック中央協議会広報部

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館

電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

国際

教皇、中東での紛争拡大を憂慮 対話による紛争終結を再度訴える

【バチカン3月8日OSV】教皇レオ14世は、イランへの軍事攻撃の終結を訴え、この紛争が中東のさらに多くの国々を不安定な状況に陥れる可能性を警告した。

3月8日、お告げの祈りを唱えた後、サンピエトロ広場に集まった巡礼者たちに語りかけ、イランや中東全土から刻々と伝えられるニュースは「深い驚愕」を引き起こしていると述べた。

「暴力と破壊が繰り返される中、憎悪と恐怖が広がり、紛争の拡大と、レバノンを含む他国の不安定化が再燃する懸念も出てきました」と教皇は続けた。

AP通信によると、イスラエル軍はテヘランの石油貯蔵施設を攻撃し、同時にレバノン南部で活動するイランの精鋭部隊「革命防衛隊」の司令官を標的とした攻撃も行ったという。

イランはバーレーンを含む湾岸地域の米

国の同盟国に攻撃を続けており、海水淡水化施設を狙ってミサイル攻撃を行った。イランのアッバス・アラグチ外相は、米国がイランの淡水化施設を攻撃したことを挙げ、「米国が先例をつくった」と発言したとAP通信は伝える。

教皇はレバノンの状況も憂慮する。レバノン政府高官は、イスラエルと親イラン民兵組織ヒズボラ間の紛争で、83人の子どもを含む394人が死亡したと確認したからだ。

同通信社によると、2月28日の戦闘開始以降、イランでは少なくとも1230人、イスラエルでは約十数人、米兵6人が死亡した。

教皇レオはカトリック信者たちに、「爆撃のごう音がやむよ

うに、武器の爆音が静まるように、また対話への道が開け、人々の声が顧みられるように」祈るよう求めた。

「この心からの願いを、平和の元后である聖母マリアに委ねます」「聖母マリアが戦争で苦しむ人々のためにとりなし、和解と希望への道に私たちの心を導いてくださいますように」と教皇は祈る。

教皇は3月1日のお告げの祈りの後にも同様の訴えを行っており、この日も対話による解決を再度訴えた。



3月7日、イスラエル軍が夜間空挺作戦を行ったレバノン東部のナビシート地区で、被害を調査する人々（OSV）

レバノンで司祭が死亡 イスラエルの攻撃受け

【クラヤア(レバノン南部)3月9日OSV】レバノンのマロン典礼カトリック司祭が3月9日、イスラエルの戦車の攻撃を受け死亡した、とカトリック関係者やカトリック系メディアが伝え、OSVニュースもその事実を確認した。

イスラエルとの国境から約8キロにあるマルジャユーン地区のマロン典礼カトリック信者約8000人が住む村に、イスラエル軍は退避命令を出していた。しかし、死亡したピエール・アル・ラヒ神父は、他の神父たちと共にその命令に従わなかった。

教皇庁はSNSサイト「テレグラム」に、

教皇レオ14世は「ここ数日続けられている中東地域での爆撃で犠牲となられた方々がいることに深い悲しみを覚えます。その多くが、子どもを含む無実の人々であったり、クラヤアで午後に亡くなったアル・ラヒ神父のように、住民を支援している方々であったりするからです」と語ったと投稿した。

教皇はまた、「状況を憂慮しつつ見守り、全ての敵意がすぐにでも解消されるよう祈っている」と述べた。

司祭と修道女らも共に残る

イスラエル軍はレバノン南部、ベイルート南部、ベカー渓谷といった親イラン民兵組織ヒズボラの本拠地と思われる拠点に大規模な爆撃を行った。同民兵とその武器を一掃する狙いがある。同民兵はキリスト教徒の中や南部のその他の村に潜伏しているとされる。

「危険があるにもかかわらず、私たちはとどまるよう強いられて

います。私たちがこの土地を守るとき、私たちは平和裏に行います。私たちの中で誰も武器を持っていません。全員が平和と善と愛で支え合っています」とアル・ラヒ神父は3月8日、クラヤアにある自身が司牧する教会で、フランスの国際放送、France 24に語った。死亡する前日だった。

マルジャユーン地区の何万ものレバノン市民は、さらなる暴力を恐れ、すでに家を離れている。

レバノンのニュースによると、イスラエル軍の戦車はクラヤアの民家を2度攻撃した。最初の攻撃で、家主とその妻が傷を負った。アル・ラヒ神父と近隣住民が急いで助けに向かった時に、2度目の攻撃があり、同神父は傷を負った。後にその傷が原因で死亡した。その他数人のレバノン住民も傷を負った。

教会の援助組織「エイド・トゥ・ザ・チャーチ・イン・ニード」は、X(旧ツイッター)への投稿で、アル・ラヒ神父は地元の共同体に熱心に関わり、特に不安定で緊迫している地域での司牧で知られていた、と伝えた。

同組織は3月9日、プレスリリースも発表し「レバノン南部で緊張感が高まっているにもかかわらず、多くの司祭や修道女たちはそれぞれの共同体に残る決断をしています。多くのキリスト教徒の家庭も、家や土地や生活を捨て去ることをせず、自分たちの村に残っています」と現状を説明した。



2023年4月の枝の主日に、レバノンのクラヤアで枝の行列に参加したピエール・アル・ラヒ神父。左から2人目（OSV）

国際

中東各国のカトリック信者 動揺と悲しみの中 祈りで一致



2月28日、イスラエルの首都テルアビブ。攻撃の報復としてイランが発射した弾道ミサイルが着弾して起きた爆発（OSV）

【エルサレム3月2日OSV】中東各国のカトリック信者は、2月28日にイスラエル軍と米軍が共同でイランへの攻撃を開始し、この地域が戦場と化している中、動揺と悲しみに打ちひしがれながらも、祈りによって応えようとしている。

アラビア半島の北部に位置する北アラビア地方で約220万人のカトリック教徒を司牧する教皇代理、アルド・ベラルディ司教は2月28日、フェイスブックに声明を投稿し、信者たちに「落ち着いて、祈りのうちに一致して、全ての人々の安全に気を配りましょう」と述べた。

イラク北部アルビルのカルデア典礼カトリック教会のバシャール・M・ワルダ大司教は3月2日、OSVニュースの取材に、アルビル空港近くの米軍基地へのイランによるミサイル攻撃の「全容を見ました」と語った。

イスラエルでは、ベネディクト会のニコデムス・シュナーベル神父—エルサレムの中心にあるシオンの丘にある「お眠りの聖母」大修道院の院長であり、イエス・キリストがパンと魚を増やす奇跡を起こした町で、ガリラヤ湖北西岸に位置するタブハにある小修道院の院長でもある—によると、タブハには60人ほどの巡礼者が避難しているという。同神父は、子どもや高齢者を含む各国から来た巡礼者たちは、2時間ほど避難しており、その間、共に祈り歌い、攻撃のさなかでも一致していたと語った。

ベツレヘムとエルサレムの間の丘陵に位置するタントウール・エキュメニカル研究所所長を務めるイエズス会のジョン・ポール神父は、OSVニュースの取材に応じ、「エルサレムは標的になっていない」と信じていたが、その日の朝は「シェルターを出たり入ったり」していたと語った。

同研究所の職員はパレスチナ人とイスラエル人。同神父は、イスラエルとイスラム組織ハマス間の紛争と、パレスチナ・ガザとヨルダン川西岸に住むイスラエルとパレスチナの人々の間に依然として緊張状態が続いている中で起きた今回の攻撃は、悲しみを呼び起こしていると指摘した。

前述のシュナーベル神父はタブハにいる巡礼者と共に、今回の攻撃で被害を受けた全ての人々のために祈っていると話す。

「他者のために祈っています。ですから、イランの国民のため、イスラエルの国民のため、パレスチナの人々のため、このような状況に直面している地域にいる人々のために祈りましょう」。さらに「避難場所がない人々のため、何が起きているか理解できないでいる全ての人々のために祈りましょう」と祈りを呼びかけた。



記事全文

シノドス最終報告書 2部会から発表 デジタル関連の専任部門新設を提言

【ローマ3月3日OSV】シノダリティー（ともに歩むこと）についてのシノドス（世界代表司教会議）研究部会は、新たに「教皇庁デジタルカルチャーと新技術に関する委員会」の設置を提言した。これは今後、数週間以内に発表される15ある同研究部会による最終報告書の第1弾の文書となり、もう一つの最終報告書と合わせて、3月3日にバチカンから発表された。

一つ目の報告書には、デジタル空間において、どのように教会のかじ取りをしていくかについての提案が含まれる。新たに直面する神学的、司牧的、教会法上の問題を監視し、司教、司祭、修道者、信徒に対するガイドラインやトレーニングを準備し、デジタル上の使命を司牧計画に統合する作業を担う司教協議会を支援するバチカンの部局あるいは委員会の設置などだ。

二つ目の報告書は、未来の司祭養成のための指針に焦点を置き、神学生の養成の一環としてより多くの女性が役割を担うことを提案している。神学生の養成のための指針と提言は以下の通り。①養成の後期に小教区や他の教会の環境で暮らす期間を設けること②神学校での養成の全過程に女性が関わること③司祭養成の段階で、司教や養成担当者だけでなく、より多くの信徒との関わりを持つこと—など。

シノドス事務局によると、教皇レオ14世は各部会の最終報告書を公開するよう指示している。シノドス事務局の事務局長を務めるマリオ・グレック枢機卿は、最終報告書は「作業文書と理解されなければなりません。これが到達点ではなく、出発点となります」と語る。シノドス事務局のウェブサイトによると、その他の13の研究部会も最終報告書を発表予定で、次回の発表は3月10日の予定。



記事全文

教会での女性の役割拡大を提案 シノドス研究部会から新報告書

【ローマ3月10日OSV】教会での女性の参加を研究するシノドス（世界代表司教会議）研究部会は3月10日、最終報告書を発表した。報告書は、教会の運営や指導的役割における女性の参加拡大を求めているが、女性の助祭職への可能性については触れていない。

この報告書は15ある研究部会から発表された3番目の報告書に当たり、残りの12の最終報告書も順次発表される。

今回の報告書の中で、同部会は福音宣教や運営に、女性が教役者と連携して指導的役割を果たせるよう「新たな場」を設けることを求めている。

女性信徒は聖霊から特定のカリスマを与えられており、そのカリスマを認識すべきだともしている。

「現代において、平等な人としての尊厳、またキリスト者としての尊厳に基づくだけではなく、神から授かったカリスマにも基づいて、女性信徒は教会の使命に参加する権利を有します」。文書は続けて、「新たな福音宣教が喫緊の課題」であり、それには「司祭という人材だけに頼る度合を減らし、女性の存在と貢献によってより豊かな宣教が可能となります」と書いている。

同部会はまた、神学や教会法が、「洗礼の秘跡に根差し、叙階に由来するものとは区別された権限の行使の新たな形を模索するよう求めます。そうすることで、教会内で女性の指導的な役割での参加が効果的に行われるための教会法の適切な形が見いだされるでしょう」と提言する。



記事全文

国際

教皇の使徒的訪問 予定発表 モナコ、アフリカ、スペインへ

【ローマ2月25日OSV】教皇レオ14世は3月から6月までの4カ月で、モナコとアフリカ諸国、スペインを訪問する。バチカンが2月25日、発表した。今年最初の使徒的訪問は3月28日、モナコへの日帰り、モナコにとっては近代初の教皇訪問となる。4月13日から23日までは、アルジェリアとカメルーン、アンゴラ、赤道ギニアを歴訪する。教皇としてのアフリカ訪問は初めて。バチカンは、アフリカ諸国訪問のテーマは平和と貧しい人のケアだとしている。



記事全文

グアダルペの聖母出現500年に向け 教皇がメッセージ

【ローマ2月25日OSV】教皇レオ14世は、メキシコ市で2月24日から開かれた会議へのメッセージで、グアダルペの聖母は「完全なインカルチュレーション（福音の文化内開花）」の模範で、「神が人々に近づく方法を示している」と述べた。メキシコでは、2031年の特別聖年に聖母出現から500年を迎える準備が進む。1531年12月、グアダルペの聖母は、メキシコの先住民、聖ホアン・ディエゴに4回出現し、その場に教会を建てるよう求めた。聖母は聖ディエゴのマントに自身の姿を映し、そのマントは現在でもメキシコ市にあるグアダルペの聖母大聖堂で展示されている。



2025年12月、グアダルペの聖母の聖画像前で祈る教皇レオ（CNS）



記事全文

教皇、中東情勢を深く憂慮 暴力の連鎖断ち切る外交を

【バチカン3月1日OSV】教皇レオ14世は、「破壊と苦しみと死」をもたらす武器の使用を非難し、中東とイランにおける「劇的な時」に、外交努力へ立ち戻るよう強く訴えた。教皇は、米国とイスラエルが2月28日の早朝に開始したイランへの最初の攻撃で殺害した同国の指導者たちの中に、最高指導者、セイエド・アリー・ハメネイ師（86）が含まれると判明した約12時間後に、この件に言及した。「安定と平和は相互の脅しや、破壊と苦しみと死の種をまく武力によって築かれるのではなく、理性的で真摯で責任ある対話を通してのみ築かれます」



記事全文

パロリン枢機卿「予防戦争」認めず 世界を火の海にさらす危険性を指摘

【ローマ3月4日OSV】米国とイスラエルがイランに対する攻撃を開始して5日目に、教皇庁国務省長官、ピエトロ・パロリン枢機卿が平和と外交の必要性を訴えた。自国に都合の良い基準で「予防戦争」を仕掛ける権利が認められるなら、世界を火の海にしてしまうリスクを冒すと同枢機卿は警鐘を鳴らす。米国とイスラエルがイランを攻撃し続け、イランもイスラエルや近隣諸国に報復を開始する中、バチカンの外交官トップであるパロリン枢機卿は3月4日、バチカン・ニュースの取材に応じた。同枢機卿は「国際法の形骸化」に懸念を示し、「力の法」へと進む危険な動きを非難した。



パロリン枢機卿（CNS）



記事全文

教皇の3月の祈り 動画公開 テーマは「武装解除と平和」

【ローマ3月5日OSV】教皇レオ14世は、3月5日にバチカンの「教皇による祈りの世界ネットワーク」が公開した動画の中で、世界中の人々に平和のために祈るよう求めた。3月の教皇の意向は「武装解除と平和」がテーマ。動画の中で教皇はオリーブの枝を持って座り、「私たちの心から憎しみ、怨恨、無関心を取り除き、私たちが和解の道具としてください」と祈る。



動画の中の教皇（CNS）



動画



記事全文

教皇の一般謁見講話



3月11日、一般謁見の前に、バチカンのサンピエトロ広場を巡る中で、子どもにあいさつする教皇レオ14世（CNS）

人間と神で築く教会 3月3日

【バチカン3月3日CNS】カトリック教会は、弱く限界のある人間と、神的な現実の両面によって成り立つ共同体だと、教皇レオ14世は一般謁見で語った。3月4日も、第2バチカン公会議とその諸文書を題材に、その主要文書の一つである『教会憲章』（「教会に関する教義憲章」）を取り上げた。この憲章は、教会の本質について考察している。

「イエスに従おうと決心した人々は、まさにイエスの迎え入れてくださるようなまなざしと手のぬくもり、解放と癒やしをもたらすみことばによって、心を動かされたのです」「けれどもそれと同時に、その方に従うことで、弟子たちは神との出会いに自らの心を開きました。実際、キリストの肉体、顔、身ぶり、みことばが目に見えない神を明らかにするのです」と教皇は説明する。

この二つのことが神の愛の本質だと教皇は言う。神は被造物の弱さを通して、ご自分を目に見えるものとし、「ご自分を現され続け、働き続けておられます」。



記事全文

教会は信仰で結ばれた神の民 3月11日

【バチカン3月11日CNS】カトリック教会は、キリストへの信仰によって一つに結ばれ、全ての人を喜んで迎え入れるように招かれたさまざまな人々で構成されている、と教皇レオ14世は、一般謁見の講話で語った。

「教会を一つに結び付ける原理は、言語や文化や民族性ではなく、キリストにおける信仰です」と教皇は3月11日、バチカンのサンピエトロ広場に集まった訪問客に語りかけた。

教皇はこの日も第2バチカン公会議の主要文書の一つ、『教会憲章』を取り上げた。この憲章は、教会を「神の民」と表現している。

教会は、「信仰のうちにイエスを仰ぎ見る全ての人々」の集合体であり、国籍あるいは文化によってではなく、キリストのうちに信仰を分かち合うことで一つに結ばれている、と教皇は説明する。

教皇は、教会は内向きになるのではなく、全ての人に扉を開け続けていなければならないと指摘し、「全ての人々の救い主である、主キリストのうちに結ばれているのですから、教会は内向きになつてはなりません。全ての人々に開かれ、全ての人々のためでなければならないのです」と強調する。



記事全文

国内

3.11から15年 仙台 愛があふれる世界に変えていく

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故の発生から15年となった3月11日、仙台カテドラル元寺小路教会^{もとてらこうじ}でシンポジウムと追悼ミサが開かれた。シンポジウムでは震災後、仙台教区で行われた支援活動と全国からのサポートを振り返り、今後の取り組みへの展望が語られた。

犠牲者への追悼と復興を祈願するミサでは、カリタスジャパン責任司教の成井大介司教（新潟教区）が、優しさと愛にあふれる世界に変えていくよう呼びかけた。仙台教区とカリタスジャパンが共催し、300人余りが参加した。

シンポジウムで話をした一人、大阪高松教区職員の深堀崇^{たかし}さんは、震災後、大阪教会管区（当時）が設立したカリタス大船渡ベース^{おおふなと}（岩手）の初代事務局長を3年間務めた。当初は「支援する側」という意識が強かったが、ある時、仮設住宅に被災者を訪ねると「あなたたちの思いは十分に伝わっているから、どうか休んでください」

と言われる。自分の態度や行動に「支援をしなければならない」と「庄」のようなものが出ていたのかもしれない、被災者にとって負担になっていたのではないかと深堀さんは気付く。「支援する側、される側」ではなく「友人」を訪ねるような姿勢を心がけるようになると、皆から自然に受け入れられるようになったと話した。

この他に、旧仙台教区サポートセン



ミサを主司式したエドガル・ガクタン司教（仙台教区／中央）

ターのスタッフで、現在はチーム・カリタス^{せんえん}仙塩のメンバーとして、地域での寄り添い活動を続けている元寺小路教会信徒の園部英俊さん、震災直後に仙台教区に入り、仙台教区サポートセンター事務局長を務めた成井司教が登壇した。

東日本大震災発生時刻である午後2時46分、聖堂の鐘が鳴り響き、ガクタン司教主司式による追悼ミサが始められた。

説教を担当した成井司教は、「15年前、苦しみのただ中にいた私たちに、世界中から優しさが注がれました。私たちはその優しさを受け、日本各地に広がって、能登半島地震にもつながっていきました」と振り返った。

そして暴力で世界の仕組みを変えることにかじを切っているかのように見える今、「世界中の慈しみ、愛を世界にもう一度伝えていく使命が私たちにあります」と呼びかけた。



記事全文

「いのちの光3・15フクシマ」 発信続ける 原発被災地の声

東日本大震災から4日後の2011年3月15日、福島第1原子力発電所（福島県）は3度目の爆発を起こし、大震災以降で最も多くの放射性物質が拡散された。

この「3・15」に合わせ、原発被災地の体験に学びミサで祈る「いのちの光3・15フクシマ」（同実行委員会主催／仙台教区後援）が3月14日と15日の2日間、福島・南相馬などで行われた。延べ約150人が参加し、一人一人が「命と平和」に目覚め、声を上げ続けることの大切さを確認した。

初日は仙台カテドラル元寺小路教会^{もとてらこうじ}（仙台市）で、原子力資料情報室の高野聡さん

が「原発の構造的暴力に抗う」と題して講演。

「構造的暴力」とは国際政治学・平和学の概念で、社会構造そのものが生み出す暴力を指す。原子力発電は、被ばく労働や核のごみ問題、地域分断、地方自治の弱体化など、多くの「差別と犠牲」の上に成り立っており、構造的暴力の中で育つと解説した。

さらに脱原発運動とは、単に別の発電方法を選ぶことではなく、構造的暴力のない状態である「積極的平和」を創り出していく営みだと強調。10万年以上の管理が必要な核のごみを生み出す文明の在り方について、宗教者が哲学的・文明論的な視座を提示することへの期待も講演のまとめとして語った。

参加者の高見久実子さん（50代・岐阜県在住）は、「戦争も環境問題も原発も全てがつながっていると感じた。神の前でどう軌道修正し、この世でどう責任をもって生きるのかを考えたい」と話した。

2日目は、南相馬市の原町教会で「現地報告」とミサを行った。

現地報告では、曹洞宗同慶寺（南相馬市）住職の田中徳雲師^{とくうん}が「15年の振り返りと、これから」について話した。マスメディアが広告主に忖度^{そんたく}し、伝えるべき事実を削る状況



田中徳雲師

を見てきた者として、伝えるために「声を上げ続ける」と述べた。

また、世界各地で戦争が続く中、日本が今後、戦争に参加していくために憲法改正の議論が高まるだろうと指摘。「命と平和を守る憲法」の在り方を考えるためにも、主権者である市民の間の「横のつながり」が大切だと述べ、意見の異なる人とも平和的な議論を重ねていこうと呼びかけた。

ミサは、原町教会を担当する幸田和生^{かずお}名誉補佐司教（東京教区／カリタス南相馬代表理事）が主司式した。

幸田司教はミサ説教で、イエスは「神は苦しむ人を見捨てない」と確信し、「自分に何ができるのか」だけを考えて行動したと話した。原発については多様な考え方があがるが、傍観者でいるのは「イエスの姿ではない気がします」と述べ、神がいま自分たちに何を望んでいるのかを問い、できることを積み重ねていくようにと促した。

ミサ後、隣接するさゆり幼稚園の旧園舎で茶話会が行われた。



記事全文



原町教会のミサ。司式は幸田和生名誉補佐司教（東京教区）

国内

米国による軍事介入から2カ月

駐日ベネズエラ大使インタビュー

「フルタイムで平和を生きる」

米トランプ政権が1月3日、南米ベネズエラに対して行った軍事介入で100人以上が犠牲となった。当日拘束されたベネズエラ大統領夫妻は、現在も米国にとどめ置かれている。2月下旬、ベネズエラのセイコウ・イシカワ駐日大使に今の思いを聞いた。

カトリック信徒でもあるイシカワ大使は介入による衝撃と教会の対応を振り返り、キリスト者が「フルタイムで平和を生きる」ことの重要性を強調。ベネズエラ国民は今、これまでの分裂を乗り越え、国を内側から立て直すための対話を始めていると言う。

イシカワ大使は、米軍が昨年9月以降、ベネズエラ北方のカリブ海で行ってきた「違法な軍事攻撃」についてこう説明した。

攻撃されたのは、麻薬密輸の疑いがあるとされたベネズエラ、トリニダード・トバゴ、そしてコロンビア船籍の船だった。犠牲者は150人以上。これらの軍事作戦には正当な手続きが欠けており、今なお多くの犠牲者が確認されていない。

「国民は冷静に行動していますが、軍事介入の記憶は新しく、心の傷は残っています」

一方、これまで国内外のメディアが主に報じてきたのは、ベネズエラの政治状況、選挙や人権の問題、さらにはノーベル平和賞を受賞した野党政治家の動向など「内政」に関する話題だった。イシカワ大使は、「今、より大切なのは、世界最大の軍事力と核兵器を保有する米国が、それらを持たない国に対して軍事行動を取ることは是非を問う議論」だと強調する。「内政問題の議論を避けるという意味ではありません。今回の問題の本質は「全ての国が共有する、唯一の世界秩序である国際法がないがしろにされた点」だと指摘する。教皇レオ14世や、ベネズエラの聖心会の修道女12人が攻撃直後に出した声明も、同じ点を訴えているとその内容を紹介した。



イシカワ大使

イシカワ大使は、前教皇フランシスコの言葉「(あなたがたは)パートタイムのクリスチャンであってはならない。常に、完全に(フルタイムの)クリスチャンでなければならない」を挙げ、今こそキリスト者が「フルタイムのクリスチャンとして」軍事侵略の停止を求めていく時だと語った。



記事全文

映画『教誨師と死刑囚』製作中 坂口香津美監督に聞く

長年、死刑囚と定期的に面会し、教誨を続けているイエズス会のハビエル・ガラルダ神父(94)を追ったドキュメンタリー映画『教誨師と死刑囚』の製作が進んでいる。指揮を執るのは、被爆者や自死遺族、児童養護施設の子どもなど、さまざまな人々の人生を見つめる作品を発表してきた坂口香津美監督。

ガラルダ神父は1994年から東京・府中刑務所で外国人受刑者の教誨を行い、2000年からは東京拘置所で死刑囚と面会を続けてきた。教誨とは、刑務所や拘置所などで被収容者の願いに応じて宗教者が面会するもので、民間のボランティアとして無償で活動する。

坂口監督がこの映画製作に取り組んだのは、6年前、ガラルダ神父のインタビュー記事を読んだことがきっかけだった。死刑制度を廃止したスペイン出身のガラルダ神父が日本で長年死刑囚と向き合っていることを知り、強い衝撃を受けたという。ガラルダ神父を訪ね、突き動かされるように映画製作に着手した。

ガラルダ神父は死刑囚を「友達」と呼んで会いに行く。「一緒にいることが楽しく、有意義」な存在だからだ。「彼とはいろいろな話をして助け合い、分かち合っています」



坂口監督



ガラルダ神父

面会直後のガラルダ神父の表情からは、刑執行までの限られた時間に「死刑囚と共有した濃密な心の交流の証し」が「体温のように」温かみをもって感じられたと坂口監督は表現する。ガラルダ神父は、「私は死刑制度自体に『反対』という言い方はしません。でも死刑(の存続)は『残念』で、死刑はなくしてほしい」と静かに語る。

坂口監督は作品の中で、日本の死刑制度についても分かりやすく伝えたいと考えているが、そのために必要な過去の映像を盛り込もうとすると高額な使用料がかかる。映画完成に向け、4月17日までクラウドファンディングを実施している。

クラウドファンディングへの協力はこちら→



記事全文

四旬節に聞く 受洗の物語 祈る前に「祈ってもらっていた」

薬物やアルコールなどの依存症を抱える人たちの回復施設、一般社団法人リカバリーハウス(茨城県石岡市)で責任者を務める加藤功次郎さん(43/茨城・下館教会)は、2025年のクリスマスに洗礼を受けた。きっかけの一つは、自分が祈るよりも前に、既に祈ってもらっている存在だと司祭に言われたことだ。

加藤さんは21年5月に東京・府中刑務所を出て、民間の薬物依



本間神父(中央右)から洗礼を受けた加藤さん(同左)とその母、代父母、ダルクの仲間たち(写真提供=加藤さん)

存症回復施設「茨城ダルク」(茨城県結城市)に迎えられた。拘置所では、薬物依存症のため、自分に「死ね」とささやき続ける幻聴や幻覚にも苦しんだ。「わらをもすがる思い」だった。入寮後は毎日、「NA」

と呼ばれる米国発祥の自助グループの集まりに通い、「12ステップ」という回復プログラムに取り組んだ。その会場の一つが下館教会だった。仲間の死などを経て、やがて同教会の本間研二神父(イエズス・マリアの聖心会)の下で聖書を学ぶことになる。

驚いたのは、自分が薬物を使わないために毎日続けてきた12ステップが、聖書理解の土台になっていたことだ。

例えばステップ1は自分の無力さを「認め」、ステップ2は自分が理解している神(ハイパーパワー)を「信じ」、ステップ3はその神に「委ねる」という段階を踏むものだが、そこに「福音のキリストとのつながり」を感じた。

ある日、加藤さんが本間神父に「祈り方が分からない」と伝えると、返ってきたのは、「まずあなたが祈られている存在だと思って(ほしい)」という、思いがけない一言。「心が楽になる感覚」を味わった。生き方の転換があった。

今は、自分のどうしようもない部分について、正直に相談できる相手がいる。ダルクだけでなく、教会にも。

※カトリックジャパンニュースは依存症者の匿名性を尊重していますが、今回は加藤さんとダルクの意向を受け、お名前と写真を掲載しました。



記事全文

国内

社会系委員会等の方向性承認

2025年度臨時司教総会

日本カトリック司教協議会（会長＝菊地功枢機卿/東京教区）は2月16日から20日まで、東京・江東区の日本カトリック会館で「2025年度臨時司教総会」を開き、これまで検討を重ねてきた社会司教委員会系諸委員会の今後の方向性を承認した。

総会には、司教16人が出席し、オブザーバーとして日本カトリック管区長協議会と日本女子修道会総長管区長会の代表4人も参加した。

社会司教委員会系諸委員会の今後の方向性については、今回の総会で、26年4月から、これまで社会司教委員会の下にあった全てのセクション（正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、部落差別人権委員会、子どもと女性の権利擁護部門、HIV/AIDS部門）を統合して一つの委員会を設立し、その名称を「いのち・平和・人権委員会」とすることを承認した。

今まで個別に行っていた活動を一つの委員会に統合することによって、カトリック教会として福音的価値観に基づいた提言や取り組みをよりいっそう推進し、教会内外の活動ネットワークとも連携することが期待されている。

主な報告事項と審議事項は次の通り。

■ 報告事項

1. 第2回「司祭生涯養成プログラムA」開催予定に関する報告

「日本の教会における司祭生涯養成プログラム」に基づき、2回目となる「司祭生

涯養成プログラムA」を27年1月に開催する予定とし、実行委員会で準備を始めたことが司祭・終身助祭生涯養成委員会委員長のエドガル・ガクタン司教（仙台教区）から報告された。

2. 「南海トラフ巨大地震対応覚書」に関する報告

「南海トラフ巨大地震発生時における、被災教区の支援体制構築のためのカトリック中央協議会による初動支援についての覚書」が、カリタスジャパンの成井大介責任司教（新潟教区）から報告された。

3. 2026年度教区分担金に関する報告

各教区負担の26年度分担金が増加することが財務委員会委員長の梅村昌弘司教（横浜教区）から報告された。

4. 「2026年四旬節キャンペーン大綱」承認に関する報告

25年12月の常任司教委員会で、「2026年四旬節キャンペーン大綱」が承認されたことが成井司教から報告された。

5. 教皇庁教理省文書に関する報告

教皇庁教理省文書『超自然現象とされるものの識別手続きのための規則』（24年5月17日公布）と『信じる民の母—救いのわざへのマリアの協力に関連するマリアのいくつかの称号について』（25年11月4日公布）を翻訳した岩本潤一氏から両文書の概要説明が行われた。

6. 2028年の「教会総会」に向けた日本の教会の具体的な取り組みに関する報告

28年の「教会総会」までの日本の教会としての具体的な取り組みの方針がシノドス特別チームの小西広志神父（フランシスコ会）から報告された。

■ 審議事項

1. 「復活ろうそくの祝福の祈り」の試用に関する件

「復活ろうそくの祝福の祈り」の3年間の試用を承認した。試用版をカトリック中央協議会のウェブサイトで公開する。

2. 社会司教委員会系諸委員会の今後の方向性に関する件

①2026年4月から、社会司教委員会の下にあった全てのセクションを統合して一つの委員会を設立し、名称を「いのち・平和・人権委員会」（Committee for Life, Peace and Human Rights）とすることを承認した。

②「いのち・平和・人権委員会」の委員長として森山信三司教（大分教区）を選任した。

③教区担当者の任命依頼をしていた社会司教委員会系諸委員会・諸部門は、その任命を終了し、2026年4月から発足する「いのち・平和・人権委員会」の教区担当者を各教区に依頼することを承認した。

3. 「外国籍信徒司牧部門」の名称変更に関する件

現在の「外国籍信徒司牧部門」について、その活動の実態と使命をよりの確に表すために、「多文化共生司牧部門」へ変更することを承認した。

5. 2026年度カトリック中央協議会収支予算書案承認に関する件

26年度カトリック中央協議会収支予算を承認した。



ス
ダ
イ
ジ
ェ
動
画



記
事
全
文

えん罪救済へ法改正求め 大署名運動キックオフ市民集会

えん罪救済のための法改正実現に向け、署名活動を開始する市民集会が2月20日、東京・千代田区の麴町教会ヨセフホールで行われた＝写真。趣旨に賛同する市民約200人が参加。弁護士が現状報告し、えん罪被害者と署名の呼びかけ人がアピールを行った。登壇者は、再審手続き開始から43年を経て無罪を勝ち取った袴田巖さんの姉ひで子さんや、昨年8月に無罪が確定した前川彰司さんら。



記
事
全
文

諦めずに平和をつくり直す 中野晃一教授が講演

諦めずに平和の道を歩むためにどうすればいいか考えるセミナーが3月4日、上智大学教授（政治学）の中野晃一さんを講師に、東京・千代田区の麴町教会ヨセフホールで開かれた。麴町教会とイエズス会社会司牧センターが共催し、70人余りが参加した。中野さんは安全保障とは互いの不安を取り除くことだと指摘。日本が過去の戦争の反省を踏まえ、近隣諸国への贖罪と共に自分たちが払った犠牲も考え、戦争しないことが重要だと話した。



中野さん



記
事
全
文

ロシア侵攻から4年 平和願い毎月祈禱会

ロシアによるウクライナ侵攻が始まって、2月24日で4年を迎えた。この4年間、毎月24日にウクライナを思い、教派を超えて平和を祈るオンライン祈禱会が続けられている。

42回目となった今年の2月24日の祈禱会には各地から35人が参加。日本基督教団の平良愛香牧師が進行し、聖歌の唱和と聖書の朗読を交互に行って平和を祈った。日本に避難してきたウクライナの人々を支援し続けている日本YMCA同盟の横山由利亜さんによる支援の現状報告もあった。



記
事
全
文

現地調査から行動へ WCRP女性部会学習会

平和構築のための諸宗教による国際NGOである世界宗教者平和会議(WCRP)の日本委員会女性部会は、戦後80年の節目となった昨年、10月に沖縄でフィールドワーク(現地調査)として宗教別学習会を行った。そこでの学びを共有し、これからの行動にどうつなげていくかを考える学習会が3月7日、イエズス会の岐部ホール(東京・千代田区)で開かれた。会場とオンライン合わせて60人余りが参加。沖縄での学習会の報告や、清泉女子大学で学生と現地調査をしている教授の講演などに学んだ。



記
事
全
文

主日の福音解説

4月5日(復活の主日)

ヨハネ 20・1-9

主の復活

毎年、復活の主日(日中)に朗読されるのは空の墓の物語である。だが、該当箇所イエスは登場しない。登場はしないが、その不在を通してイエスはこの物語の核心に在り続ける。「見て、信じた」弟子がいた以上、イエスの不在は決定的な役割を果たしたのである。

ヨハネ福音書には次のようにある。「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」。福音書は復活を信じたとは明記していない。では、仮に復活ではなかったとすれば、一体何を信じたのか。「主が墓から取り去られた」というマリアの証言であろうか。こうした解釈が古くから存在することも踏まえつつ、レイモンド・E・ブラウン(1928-1998)は注意深く疑義を呈する。遺体消失を単なる盗難と見なすような通俗的理解を「信じた」と伝えるために福音書が記されたとは考え難い、というのである。

では、何を信じたのか。ここに目的語は示されていないが、ブラウンは「復活を」と解する他ないと結論付ける。私もこの点においてブラウンにくみするものである。ただし、そう解すると次節との連関が問題として浮上する。次のように記されているからである。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである」。復活を信じながらなお復活を理解していないという点は、文脈上不自然であると多くの聖書学者が指摘してきた。

しかし、この問題に踏み込む前にもう一つの動詞-それも目的語を伴わない動詞-に注目しておきたい。「見て、信じた」の「見た」である。この「もう一人の弟子」がヨハネ福音書の著者である可能性は高いが、彼は何を見たのか。これについても福音書は沈黙したままである。墓の中に入ったのだから、当然、亜麻布やイエスの頭を包んでいた覆いなどを見たに違いない。物語の展開上、それらを見て復活を信じたと解釈するのが最も自然であろう。ただし、私自身は墓の状態や亜麻布の位置関係それ自体が、復活信仰の直接

の契機であったことには慎重でありたい。なぜなら、「見たから信じた」という図式は、ヨハネの文法と必ずしも整合しないように思われるからである。ヨハネは、イエスの口を通してトマスに「見ないのに信じる人は、幸いである」(ヨハネ20・29)と言わせた福音記者である。推測の域を出ないが、ヨハネは復活信仰に至った直接の原因として「見た」という動詞を用いてはい

ないのではないかと。ギリシャ語原文は「見た、そして、信じた」である。

いささか飛躍と映るかもしれないが、近接する二つの動詞の間に、いくばくかの時間的経過があったのではないかと私は考えてみたい。もう一人の弟子が見たものとは、結局のところ、福音書に記されている出来事の全体だったのではないかと。復活の光に照らされて、彼は自らが体験してきたことを新たに見たのであろう。それでもなお、多くは理解されないまま残ったのである。従って、第四福音書の著者とも考えられているこの弟子はそうした無理解についても伝えながら、祈りのうちに長い観想の歳月を経てようやく復活を信じるに至った、その歩みを読者に示しているのではないかと。そのように、私は考えてみたい。
くまがわゆきのり
(熊川幸徳神父/サン・スルピス司祭会)



4月12日(復活節第2主日(神のいつくしみの主日))

ヨハネ 20・19-31

見ないで信じる信仰

わたしたちは皆、見えない神様を信じています。そこで、信仰生活の中で、何かを通してでも見えない神様に会い、神様の存在を少しでも感じたいと思っています。信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することだからです(ヘブライ11・1参照)。今日の福音に書いてあるように、イエス様は実際、福音書に記されていないたくさんの方のしるしを行われ、イエス様の時代に人々はそのしるしを見ました。もちろん、イエス様は復活されて今も生きておられるので、そのしるしは今も引き続き行われています。そしてそのようなしるしを体験した人々の物語が教会の中でたくさん伝承されています。

だからといって、しるしを経験した全ての人々が確固たる信仰を持つようになるわけではありません。イエス様の時代にも、たくさんの方のしるしを示してくださったにもかかわらず、信じない人もいたのです。多くの人々が奇跡を経験してみたが、その理由は、奇跡を通して主が本当に生きておられると気付いたら、より確実に信じる事ができるだろうと期待するからでしょう。あるいは、試練や苦しみを受けて傷つき、神様が本当におられるか疑いが生じた時、自分に対する神様のいつくしみを確認したくて奇跡を望む場合もあるでしょう。しかし、多くの人々にとっては、好奇心と疑惑のためです。不思議で驚くべきことを実際に自分の目で確認したいと思うのです。そしてそれが自分の信仰に役立つと思うでしょう。

ところが、主が望んでおられる真の信仰は、奇跡やしるしを経験したかどうかに関係ありません。むしろ、見ないで信じる信仰なのです。奇跡やしるしを通して信じることはできません。しかし、それに頼る信仰は、さらに大きな奇跡やしるしを求めようになります。不思議で驚くべきことがない信仰生活を無意味に思い、結局、不思議なことを行われぬ神様を恨んだり、否定したりすることになるのです。見なければ信じられないと言うトマスに対して、イエス様はご自分の手と脇腹の傷を見せてこう言われます。「見ないのに信じる人は、幸いである」

わたしたちも皆、トマスのように復活されたイエス様に会いたいと思いますが、トマスが復活されたイエス様だと分かったのは、その傷を見てからなのです。そこから、この世にあってわたしたちが受けた傷は、わたしたちが復活にふさわしい者になって永遠の命を受けるとしてもなくならないという意味でしょう。すなわち、受難の傷が復活の証拠になるのです。同じように、わたしたちが主の復活によって新たにされたことに気付くためには、まず自分が受けた傷、イエス・キリストと共に受けた困難と痛み、そしてイエス・キリストと共に死を迎えたところを見つめなければなりません。主の復活の証拠は奇跡やしるしではなく、主が受けられた傷にあるからです。わたしたちの信仰は復活の信仰です。奇跡やしるしを見ようとする信仰者ではなく、逆に人の傷や苦しみに目を向ける信仰者になりましょう。見ないで信じる復活の信仰はそこにあるからです。(ダニエル・キム・ドンウク(金桐旭)神父/韓国殉教福者聖職修道会)



主日の福音解説

4月19日（復活節第3主日）

ルカ 24・13-35

イエス様は諦めない！

イエス様のご受難と十字架上の死に、イエス様を守れずに、最後までついていけなかったふがいなさに弟子たちは絶望しました。

全てを諦めていた二人に、イエス様は近づかれます。「あなたたちが話していることは何のことですか？」と。イエス様は全てを分かった上でこのように声をかけ、しばらく様子をうかがっています。対照的に「わたしたちはあの力ある方に望みをかけていたが終わった」と悲しそうに話す二人。さらに「仲間が墓にあの方の遺体がないと言い、神の使いがあの方が生きていと語った」と。弟子たちはそんなことはあり得ないと決めつけています。イエス様は「ああ、まだ信じないのか」と言われ、ご自分について話されます。二人は宿に着いてイエス様に「わたしたちともっと一緒にいてください」と無理に頼みます。イエス様が彼らと食卓に着き、パンを祝福し裂き与えると、彼らは目が開かれます。イエス様は彼らの絶望を取り除いてくださり、彼らの心は燃えて立ち上がり、いるべき場所へ戻って行きます。

以前、入院中の方から「神父さんに会いたい」とのご依頼をいただき、ご聖体と共にお見舞いに行きました。その方は余命を告げられていました。病室に入りあいさつすると、開口一番「俺は死ぬことは何もなか(何の問題でもない)…。ただ、なんで今まで神様のことをちゃんとせんかったんか！(神様のことを大切にできなかったのか!)」そんなことだけがどおしてもいかん(そのことがほんとに許せない)」と大泣きされ悔やんでおられました。死を前にして自分の人生の中で神様のことを大切にしていなかった…。病氣や死よりもそのことに苦しんでおられ、最後に司祭と呼ばれたようです。

「もう、よかよ(大丈夫)。今日はイエス様が来られとるよ(来てくださっている)、お祈りして、ご聖体を頂こうか」と声を掛け、「天にまします、めでたし、願わくは」と祈りを始めました。涙を流して流してご聖体を拝領された彼に「ご聖体はおいしかる？(おいしいですか?)」と尋ねました。「おいしか」。彼は泣きながら笑顔で答えました。



ていきました。

神様を大切に、神様から大切にされて…。

(寺浜亮司神父/福岡教区)

4月26日（復活節第4主日）

ヨハネ 10・1-10

世界召命祈願の日

イエスの声に聞き従う

門のたとえ、羊飼いと羊のたとえを通して、救い主イエスがどのようなお方であるかを語っているのが本日のヨハネ福音書の内容です。

まず門から入る者と門から入らない者がいることが述べられ、門から入る者こそが羊飼いであると説明されています。ここでの門というのは羊を入れておくための囲いの入り口のことです。扉が付いていたそうです。

朝、羊飼いは囲いの門を開け、羊を連れ出し、青草のある所や水場へ導いていきます。夕方になると羊飼いは羊を門から囲いの中に入れます。羊は危険から守られ、安心して眠ることができます。



次にイエスとイエスを信じる者との関係が羊飼いと羊にたとえられています。とくに羊飼いと羊の親しい関係が強調されています。羊の特徴は羊飼いの声を「聞き分ける」ことです。また羊飼いは自分の羊の名前を呼んで連れ出すとも述べられています。

たとえに出てくる羊は羊毛を取るために飼われています。そのため、羊飼いと羊は何年も一緒に過ごすことになり、関わりは深くなっていきます。羊飼いはそれぞれの羊の個性に応じて名前を付け、必ず名前を呼んだそうです。羊の方も羊飼いの声を知っていて呼びかけにこたえて付いて行きます。

それと同じように、イエスを信じる者とはイエスの声を聞く人のことです。ただ聞くというのではなく、聞いて、そして従って行くということです。

門のたとえ、羊飼いと羊のたとえを通してイエスは自身の使命を語るのですが、その意味を理解することができないファリサイ派の姿が描かれています。ファリサイ派のように頑なにイエスを受け入れようとしない人々は盗人であり、強盗であると断じられています。

最後にイエスは「はっきり言っておく。わたしは羊の門である」と宣言しています。イエスは羊を入れておくための囲いの門そのものであるということです。羊の門のたとえを通して、イエスは「救いへの門」であることが明かされます。

イエスという門を通る人は日ごとの糧を見だし、また神と共に生きる命に導かれます。イエスの声に聞き従う人が「命を受けるため、しかも豊かに受けるため」に救い主はこの世に遣わされて来たのだとヨハネ福音書は告げています。

(立花昌和神父/東京教区 カットは全て高崎紀子)

文化

● 映画 ●

『キング・オブ・キングス』



© 2025 MOFAC Animation Studios LLC.

イエス・キリストの誕生から復活までを描いたアニメーション映画。韓国の映像作家でキリスト者のチャン・ソンホ監督が製作し、北米では2025年、公開された韓国映画として歴代最高の興行収入を記録した話題作だ。

原作は、英国の国民作家チャールズ・ディケンズが自身の子どものために執筆した『主イエスの生涯』。この映画も、ディケンズがイエス・キリストの生涯について書いた未発表の作品を息子らに語り聞かせるかたちで進む。

『アーサー王』の物語に夢中な息子ウォルターは、ある冬の晩、父親の語りに耳を傾け始めた。「アーサー王よりも偉大な王」の話をすると言うからだ。剣を手に戦う勇敢な王の登場を期待するウォルターだが、その期待は冒頭から裏切られてしまう。王が誕生したのは城の中ではなく、馬小屋だった。成長してからも、一向に“偉大な王”になる気配はない。だがウォルターは次第に物語に引き込まれ、イエスと弟子たちの後を追うようになる。やがて、人々の罪を引き受けていくキリストの受難、十字架上の死に立ち会い、深い悲しみの中で復活の主を見つける。

精細な3Dアニメーションに導かれ、ウォルターと一緒に聖書の世界へ。見る者もイエスのまなざしに出会うだろう。

3月27日から、TOHOシネマズ日比谷（東京）などで全国順次公開。



公式サイト

短歌

毎月5日まで(必着)、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は、本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



病床より身を乗り出して水たまりにうつる初日に手を合す友 秋田 畑山真理子

【評】病床にあれば初日を見に行くこともできません。せめてもと水たまりに映った初日を拝む友の姿が「身を乗り出して」に表現されています。回復を願う必死な友の思いが伝わります。

本たちにわが来し方のしづまりて捨てかねてをり冬日やはらか 横濱 森山美智子

背をなでてさつと爪切る老い猫は「あはれみたまへ」のアリア聞きゐて 三鷹 関 静男

馬といふひと字に託す命毛の佳き年なれと祈る書き初め 福岡 三谷 淑美

目の見えぬ人を導く大型犬バスでは主人の足の間に 横濱 吉村 一

贈られし八丈絹のネクタイを堅めに締めて教壇に立つ 東京 植竹 雄太

久々に餅つき見ては白と杵漢字二つを思ひ出したり 東久留米 平山 努

翻訳のこもこもありし労苦超え常に奇跡ぞ日本語聖書 新発田 樋口 るか

今はもう何もお返し出来ぬのに葉はあまた袋にいっぱい 横濱 永井 栄司

伊木力のみかんの里で四百年少年使節のミゲルは眠れり 横濱 西前 敦子

俳句

毎月5日まで(必着)、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



◎水仙や待合室に凜として 草加 長谷部禎子

【評】待合室に楚々^{そそ}と生けられた水仙のかれんな姿 ◎突き上げる神学院の露の臺 調布 田邊 久義

【評】春を告げる露の臺の地を割る強さが描けた 聖母像静かに立てる日向ぼこ 浦安 篠塚 歴山

年酒酌お紙の Copp の底に金 豊中 岩田 都世

多摩川の流れ変らぬ去年今年 川崎 守田 光代

寒明けて時間変更英語ミサ 大阪 酒井 湧水

賀状には平和を運ぶ馬描き 川崎 吉田千津子

思ひ出は宝箱へと年始 佐世保 川口 栄子

ミサ終へし山の教会風花す 神戸 西村みどり

竜の玉青年は声出さず泣く 東京 脇谷 善之

天上の夫を偲びて去年今年 神戸 内田 泰代

天指して春待つ小枝語り合ふ 福岡 木本 敬子

去年今年吸ひ込まれゆくチャペルかな 伊丹 上野恵津子

初富士に目もくれず指スクロール 那須塩原 荒川千衣子

戦場はパン無き世界雑煮かな 蓮田 向田 良子

石抱くやうに張り付く冬の蝶 神戸 涌羅 由美

水仙の楽園ありと香り立つ 神戸 高橋たづ子

茶会とて和服の妻や日脚伸ぶ 神戸 屋代 弘忠

杉花粉スカイツリーを包み込み 神戸 選者 吟

きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク) 4月

【教皇の意向：危機に瀕する司祭】
 召命の危機にある司祭が、必要な霊的同伴を見出しますように。そして、教会共同体が理解と祈りをもって司祭を支えることができますように。

【日本の教会の意向：すべての人の召命】
 すべての人の召命のために祈ります。私たち一人ひとりが、自分が何に召されているかを識別し、神とのかかわりの中で歩むことができますように。

欧米においては司祭叙階後10年以内に約13%が司祭職を離れ、45歳以下の司祭の60%以上が燃え尽き症候群に

さらされているとの報告があります。そこには司祭の高齢化、召命減少による司牧負担の増加、孤立や孤独、周りの過剰な期待、信徒からの批判、霊的枯渇などが考えられます。神の愛とゆるしの恵みを人々に伝えようとする司祭が何よりもまず、自分において神の恵みに触れることが求められます。そのためにふさわしい祈りの生活や霊的同伴の機会が与えられ、教会共同体の皆が司祭の立場や負担を理解し、祈りと励ましと協働で支えることができるよう祈りましょう。

*

日本ではカトリック信者はいまだに約

0.4%にとどまっています。信徒の高齢化も進み、ミサ出席者の7割が60代以上とされています。若い世代への信仰の継承もますます難しくなっています。少数派の信徒は社会や家庭の中で孤立しがちで、世俗に流されやすくなっています。このような状況で信仰をふさわしく保つには、信徒が霊的体験を継続して持ち、神と内的につながることによって、神と結ばれた確かな召命を生きることが欠かせません。この召命は信徒だけでなく、全ての人のものです。どの人もが神の望まれる召命に目覚めて、神と共に人生を歩んでいけるよう祈りましょう。

訃報

井出愛子修道女（シヨファイユの幼きイエズス修道会）2月12日、長崎市内の病院で膵（すい）頭部がんのため逝去。99歳。1926年長崎県生まれ。49年同会入会。51年初誓願。初誓願宣立後、東京、和歌山、長崎、鹿児島、沖縄で幼稚園の教諭、園長として幼いのちの成長を願いながら奉仕した。69年からローマで総顧問として働き、帰国後は同会本部院長、管区顧問として重責を担った。その後、アフリカのチャドでの宣教を経て、奄美大島（鹿児島）の西仲勝（にしなかがち）修道院に派遣され、乳児院の園長として、また88年に開設された特別養護老人ホームの園長として重責を果たした。晩年は派遣された場で、院内の奉仕と病者訪問を使命とし、病める人、孤独な人の元に神の愛を届けるため、高齢になっても喜んで精力的に出向いていた。2014年に圧迫骨折し、その数年後、歩行困難になりグループホームに入所。浦上教会の見える部屋でアンジェラスの鐘を聞きながら祈りのうちに平和な療養の日々を送っていたが、膵頭部がんのため今年1月に聖フランシスコ病院ホスピス病棟に入院した（以上長崎）。どんな時も忍耐強く使命を果たし、晩年は優しい笑顔で「ありがとう、祈っているよ」と見舞う人を励ましていた。



モレノ・アルフォンソ神父（イエズス会）2月16日、老衰のため逝去。98歳。1927年スペイン・グラナダ生まれ。43年同会入会。52年来日。58年司祭叙階。60～64年岩国教会（山口）で司牧。64～67年出雲（島根）主任。67～79年防府（ほうふ）主任。80～82年徳山助任ならびに幼稚園園長（以上山口）。83～99年益田（島根）主任。99～2000年三次（みよし）主任。



00～01年向原責任者（以上広島）。01～03年岩国（山口）主任。03～13年浜田（島根）主任。13年から山口教会で司牧を行っていたが体調を崩し、17年9月から東京のロヨラハウスで療養していた。生涯のほとんどを教会使徒職にささげ、長年、幼稚園運営にも取り組んだ。音楽や語学力、記憶力に優れ、宣教熱心だった。齋藤成夫（なりお）修道士（フランシスコ会）2月17日、東京・世田谷区の同会修道院で舌がんの胸骨転移による臓器不全のため逝去。91歳。1935年秋田県生まれ。上京し就職したのが、東京・世田谷区瀬田にある同会聖アントニオ修道院の近くの青果店だった。注文を取りに修道院の台所をたびたび訪れ、台所を担当していたイシドロ・マルティ修道士と顔見知りになり、やがて入信、入会した。62年初誓願。65年の荘厳誓願宣立後から、聖アントニオ修道院をはじめ、さいたま修道院（埼玉）、桐生修道院（群馬）、田園調布修道院（東京）で、台所仕事と修道院の維持管理のために精力的に働いた。病気と高齢のため働けなくなっても、祈りの生活とリハビリに励み、最後まで修道者としての歩みを続けた。平田恵修道士（フランシスコ会）3月3日、老衰による多臓器不全のため逝去。94歳。



1931年長崎県生まれ。同会入会前に被爆し、長崎市内の教会のがれきの片付けなどを経験した。54年初誓願。57年荘厳誓願宣立。荘厳誓願後は、瀬田、田園調布（以上東京）、さいたま（埼玉）などの修道院で会計、修道院の保全などの仕事と祈りを通じて兄弟たちの宣教を支えた。体が動かなくなってもからでも忍耐してリハビリに励む姿や祈りの生活を通して良い模範を示した。



告知板

■全国
▶オンライン講座「イエスとともに生きて死す～ハンス・キュンクの生涯と思想～」4月23日、5月28日、6月25日、7月23日、9月24日、10月29日、11月26日、2027年1月28日、2月25日、3月25日（毎月第4木曜／8・12月休会／全10回）午後7時～8時30分、Zoomによるオンライン開講（欠席時も録画視聴可）。キュンクの人生と思想展開をたどる。講師＝福嶋揚（神学者／東京大学大学院死生学・応用倫

理センター研究員）。日本クリスチャンアカデミー関東活動センターウェブサイト（下記QRコードからアクセス可）、メール（info@academy-tokyo.com）、または電話（03-3207-6198）で要申し込み。詳細も同サイト参照。全10回12,000円（一般）、8,000円（学生・賛助会員）。電話03-3207-6198



■東京
▶初金の祈りの集い（聖体賛

美式と黙想～聖歌隊の歌を聴きながら）4月10日（第2金曜）午後7時～8時、麴町教会主聖堂。司式＝ジェームス・ボニー神父（イエズス会）。奉唱＝初金聖歌隊（指揮：大内葉子）。電話03-3263-4584 麴町教会

▶青年の祈りのひととき 4月24日（金）午後6時30分、聖心侍女修道会五反田第一修道院。祈り、分かち合い、茶話会。対象＝18歳（高校生は除く）～35歳でカトリックの祈りや信仰に心が向いている人（宗教不問）。参加司祭＝小田武直神父（東京教区）。下記QRコードから要申し込み。電話080-8259-0993 東京教区教皇庁宣教事業 田所



▶竹下節子『カトリックの缶詰―フランスと日本のはざま』出版記念講演会 4月25日（土）午後2時～4時55分、松原教会聖堂。講師＝竹下節子（比較文化史家、バロック音楽奏者）。書籍販売・サイン会あり。無料。詳細はオリエンス宗教研究所ウェブサイト参照。電話03-3322-7601 オリエンス宗教研究所

番組

ラジオ心のともしび（朗読・坪井木の実）
4月の放送日と執筆者 1日（水）こいずみゆり・2日（木）三宮麻由子・3日（金）森田直樹・4日（土）コリーン・ダルトン・6日（月）熊本洋（よう）・7日（火）萩原久美子・8日（水）古橋昌尚・9日（木）岸本景子・10日（金）片柳弘史・11日（土）山本ふみり・13日（月）湯川千恵子・14日（火）竹内修一（おさむ）・15日（水）崔友本枝（ちえー・ともえ）・16日（木）山本久美子・17日（金）村田佳代子・18日（土）谷口恵美（めぐみ）・20日（月）今井美沙子・21日（火）松浦信行・

■静岡
▶裾野^{しほ}聖書を学ぶ会主催「主日の福音を通してみ言葉に生きる」6月27日（土）午後2時～28日（日）午後3時、聖心会裾野（すその）マリア修道院（黙想の家）。講話「主日の福音を通してみ言葉に生きる 柗^{しほ}生（ひらぎ あけお）師遺稿『主日の福音読解』の読み方」。講師＝山下敦神父（大分教区／日本カトリック神学院聖書学講師）。4月30日（木）までにメール（stj-kki@leo.bbiq.jp）で要申し込み。無料。✉stj-kki@leo.bbiq.jp 木本

■兵庫
▶日本聖書協会後援聖書セミナー「聖書の文脈で読むコヘレトの言葉」4月2日、9日、16日、23日（全て木）午後1時30分、神戸バイブル・ハウス（神戸市）。講師＝老松望（大阪聖書学院教師）。内容＝「創世記とコヘレトの言葉」（2日）、「申命記とコヘレトの言葉」（9日）、「箴言とコヘレトの言葉」（16日）、「コヘレトの言葉と新約聖書」（23日）。一般各回1,500円、KBH友の会会員各回1,000円。電話078-252-1966 神戸バイブル・ハウス

22日（水）松本准平（じゅんぺい）・23日（木）堀妙子・24日（金）古川利雅・25日（土）服部剛（ごう）（以上テーマ「担い手」）・27日（月）岡野絵里子（テーマ外「委ねる」）・28日（火）中島貴之・29日（水）許書寧（きよ・しゅにん）・30日（木）中井俊巳（以上テーマ「担い手」）。

※4月5日からの変更▶南日本放送＝日曜午前6時、月～金曜変更なし。

ウェブサイト（下記QRコードでアクセス可）では24時間視聴可能。詳細は電話075-211-9341。



ラジオ YBU 心のともしび 5分					
放送局	放送日(曜日)時間		放送局	放送日(曜日)時間	
STVラジオ	月～金 =5:35	土 =5:00	KBS京都	月～金 =5:55	土 =5:15
			毎日放送	月～金 =5:45	土 =4:55
			和歌山放送	月～金 =6:35	日 =6:15
			ラジオ関西	月～金 =5:35	日 =6:05
エフエム青森	月～土 =6:50		山口放送	月～土 =5:25	
I BC岩手放送	月～土 =5:20		中国放送	月～土 =5:00	
ラジオ福島	月～土 =5:25		山陽放送	月～土 =5:25	
エフエム仙台	月～金 =5:55		山陰放送	月～土 =5:25	
山形放送	月～土 =5:10				
エフエム秋田	月～土 =5:55		南海放送	月～金 =5:25	土 =6:45
新潟放送	月～金 =5:25	日 =6:30	四国放送	月～金 =5:10	土 =6:10
			高知放送	月～金 =5:20	日 =6:35
ニッポン放送	月～金 =5:35	土 =5:25	RKB毎日放送	月～金 =5:25	日 =6:00
信越放送	月～金 =5:25	日 =6:15	熊本放送	月～金 =5:10	日 =6:05
山梨放送	月～土 =5:25		長崎放送	月～金 =5:25	土 =6:35
静岡放送	月～金 =5:25	土 =5:40	大分放送	月～金 =5:25	土 =7:00
			宮崎放送	月～土 =5:20	
福井放送	月～金 =6:45	土 =5:50	南日本放送	月～金 =5:25	日 =6:00
北陸放送	月～土 =5:15				
東海ラジオ放送	月～金 =5:45		琉球放送	月～土 =5:25	
北日本放送	月～金 =6:30	土 =5:30			

イエスの食卓に招かれて

カラバッジョ作 『エマオの晩餐』^{ばんさん}

アンドレア・レンボ補佐司教(東京教区)に聞く

アンドレア・レンボ補佐司教



東京教区補佐司教。イタリア生まれ。真生会館(東京)やカトリック船橋学習センター・ガリラヤ(千葉)の講座で、キリスト教美術の魅力と共に福音を伝えている。

復活祭にぴったりの作品をご紹介します。カラバッジョ(1571~1610年)は生涯で二つの『エマオの晩餐』を描きましたが、今回ご紹介するのは1601年ごろに描かれ、現在はロンドンのナショナルギャラリーに所蔵されている作品です。

(本紙の表紙に絵の全体を掲載)

イエス様が復活した日の夜、二人の弟子がエマオに向かって歩きながら、イエス様の受難の出来事について話し合っていると、復活したイエス様に再会します。しかし二人は目が遮られているので、その方がイエス様本人だとはすぐに分かりません。『エマオの晩餐』では、宿屋で二人の弟子がイエス様と共に食卓にあずかり、イエス様がパンを裂いた瞬間、弟子たちが復活したイエス・キリストだと認識する場面が描かれます。

それでは人物を丁寧に見ていきましょう。

私は赤と白の衣を着たイエス様の左(画面右)にいる、左胸に貝を付けているのが、弟子のクレオパだと考えています。右後ろは宿屋の主人(画面左から2人目)、斜め右前にいるのがもう一人の弟子(画面左)です。



巡礼者としての弟子たち

イエス様の衣の赤は「愛と犠牲」、白は「信仰と純潔」を表しています。若々しく描かれた顔は、復活を意味します。

両手の形にも注目してください。どこか見覚えがありませんか。『最後の晩餐』(レオナルド・ダビンチ作)でイエス様がパンに伸ばした右手、『アダム』(ミケランジェロ作)で神がアダムに向かって伸ばす右手を連想させる手です。パンを新しい命に変える創造の手、として描かれています。カラバッジョは先人たちの作品を尊重し、学んでいたため、自身の作品にもその影響があると考えられています。

目が開かれた二人の弟子は、イエス様を



『アダム』(ミケランジェロ作)の一部

見て驚いています。宿屋の主人はイエス様をじっと見つめています、どのようなお方なのか分かっていません。でもなぜ宿屋の主人の服が、イエス様と同じ赤と白なのでしょう。カラバッジョが伝えたかったのは、イエス様を知らない人でも、イエス様の救いにあずかることができる、イエス様の十字架によって救われるということなのです。

クレオパの左胸に付いているのは、巡礼者を象徴するサンティアゴ・デ・コンポステラ(スペインの著名な巡礼地)の貝です。当時、巡礼は一生に一度の悔い改めの行為でした。クレオパは、巡礼者としてイエス様と出会い、共に歩き、パンが裂かれた途端、イエス様だと認識したのです。



もう一人の弟子は、「Faldistoro」^{ファルデストール}と呼ばれる椅子に座っています。この椅子は当時、教皇がローマ以外の場所で使うものでした。立ち上がろうとしている弟子の袖の右肘が破れていますね。裂けた服は教会が完璧ではないことを表しています。カラバッジョがこの弟子の姿に込めたメッセージは、教会は完璧ではないのだから、権威に座り続けるのではなく、クレオパと共に悔い改めのための巡礼に出かけるべきだ、という思いです。

巡礼の「希望」は、クレオパの首に巻かれた布と、もう一人の弟子の服の緑色に込められています。

イエスの食卓を囲む

次に、食卓に描かれているものを見ていきましょう。

二人の弟子の前には、イエス様が裂いて渡したパン、つまりイエス様ご自身が置か

れています。パンが渡された瞬間に、二人は信仰の目が開き、見えるようになりました。

イエス様の右手の下に置かれたぶどう酒は、御血であり、十字架の犠牲と救い、そして聖体祭儀を連想させます。

食卓の手前にある果物の籠をよく見てください。今にも端から落ちそうです。これは現実の不安定さや、人間の存在のむろさを暗示しています。そして、籠に光が当たって食卓に落とす影は魚の形をしています。魚はキリスト教で最も古い象徴の一つであり、ギリシャ語の「魚(ichthys)」は、「Iesous Christos Theou Yios Soter」(イエス・キリスト・神の子・救い主)の頭文字を取った単語なのです。

籠の中のブドウはぶどう酒と同じく救済を意味します。リンゴは原罪の象徴。ラテン語では「リンゴ」も「悪」も「Malus」と書きます。「悪のリンゴ」は『創世記』の禁じられた木の実を連想させるからです。種が多いザクロは復活や永遠の命を表します。熟し過ぎた果物、傷のある果物も描かれていますが、これは限りある人間の命のはかなさを意味します。

もう一つ食卓に載せられている焼かれた鶏(肉料理)は、日常的な、家庭的な食事であり、神が私たちの日常に現れることを意味しています。



私たちが同じ食卓を囲み、イエス様の言葉に耳を傾け、同じパンにあずかる時にイエス様は現れます。他の人を批判したり、裁いたりしないで、私たち皆が巡礼者としてイエス様に従いましょう。

ほら見てください。イエス様の正面が空いていますよ。復活されたイエス様は、私たちが食卓に招いているのです。